



2015年度 第16回
高校生エッセー・コンテスト /



© Bundesregierung / Wegmann

作品集 *Anthology*

未来のために 若い人たちへ

～歴史に学ぶことを訴えた～

**ヴァイツゼッカーに
手紙を書こう**

津田塾大学
<http://www.tsuda.ac.jp/>



Richard von Weizsäcker
© Bundesregierung / Reineke

2015年は、戦後70年の節目の年です。
高校生のみなさんにとっては、第二次世界大戦は遠い過去の出来事かもしれません。自分たちには責任も関係もない話、と感じる人もいるでしょう。

右頁の文章は、敗戦から40年たった1985年5月8日(ドイツの終戦記念日)に、当時西ドイツの大統領だったリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーが、ドイツ連邦議会でおこなった記念演説の一部です。ドイツには、ナチス政権によるユダヤ人らの大虐殺(ホロコースト)という暗黒の歴史がありました。そうした過去を振り返るのは重苦しく、困難を伴うものですが、氏は「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」という有名な言葉を残し、罪の有無や老幼を問わず、真実を求め、歴史を心に刻む重要性を説いたのです。この演説は世界中の人たちに深い感銘を与えました。

いまま世界のあちこちで不寛容さがはびこり、紛争や虐殺はあとを絶ちません。憎しみの連鎖は止まらず、出口の見えない難しい問題が次々と起きています。

これからの時代を担うみなさんは、ますます複雑になる世界の現実と向き合い、問題解決の道を探っていかなければなりません。過去といかに対話し、歴史から何を学び、それをどう未来へつないでいくのか——。ヴァイツゼッカーの演説も「若い人たちにお願いしたい」という、次の世代への呼びかけで結ばれています。

ヴァイツゼッカーは2015年1月31日に、94歳で亡くなりました。右頁の演説を読み、みなさんが思うこと、考えることを、ヴァイツゼッカーへの手紙という形式で書いてみてください。

目次 *Index*

入賞作品	3
講評	4
最優秀賞作品	5
優秀賞作品	6
特別賞作品	11
応募者在学校一覧	12
募集要項	13

1985年5月8日

ドイツ終戦40周年記念演説 (一部)

President Richard von Weizsäcker

... It is true that hardly any country has in its history always remained free from blame for war or violence. The genocide of the Jews is, however, unparalleled in history.

The perpetration of this crime was in the hands of a few people. It was concealed from the eyes of the public, but every German was able to witness what his Jewish compatriots had to suffer, ranging from plain apathy and hidden intolerance to outright hatred. Who could remain unsuspecting after the burning of the synagogues, the plundering, the stigmatization with the Star of David, the deprivation of rights, the ceaseless violation of human dignity? Whoever opened his eyes and ears and sought information could not fail to notice that Jews were being deported. The nature and scope of the destruction may have exceeded human imagination, but in reality there was, apart from the crime itself, the attempt by too many people, including those of my generation, who were young and were not involved in planning the events and carrying them out, not to take note of what was happening. There were many ways of not burdening one's conscience, of shunning responsibility, looking away, keeping mum. When the unspeakable truth of the Holocaust then became known at the end of the war, all too many of us claimed that they had not known anything about it or even suspected anything.

There is no such thing as the guilt or innocence of an entire nation. Guilt is, like innocence, not collective, but personal. There is discovered or concealed individual guilt. There is guilt which people acknowledge or deny. Everyone who directly experienced that era should today quietly ask himself about his involvement then.

The vast majority of today's population were either children then or had not been born. They cannot profess a guilt of their own for crimes that they did not commit. No discerning person can expect them to wear a penitential robe simply because they are Germans. But their forefathers have left them a grave legacy. All of us, whether guilty or not, whether old or young, must accept the past. We are all affected by its consequences and liable for it. The young and old generations must and can help each other to understand why it is vital to keep alive the memories. It is not a case of coming to terms with the past. That is not possible. It cannot be subsequently modified or made undone. However, anyone who closes his eyes to the past is blind to the present. Whoever refuses to remember the inhumanity is prone to new risks of infection.

(中略)

Hitler's constant approach was to stir up prejudices, enmity and hatred. What is asked of young people today is this: do not let yourselves be forced into enmity and hatred of other people, of Russians or Americans, Jews or Turks, of alternatives or conservatives, blacks or whites. Learn to live together, not in opposition to each other.

As democratically elected politicians, we, too, should heed this time and again and set a good example.

Let us honour freedom.

Let us work for peace.

Let us respect the rule of law.

Let us be true to our own conception of justice.

On this 8th of May, let us face up as well as we can to the truth.

入賞作品

応募作品 237編

(内訳:英語作品92編、日本語作品145編、女性207人、男性30人)

選考の結果、次の方たちが
最優秀賞・優秀賞・特別賞に選ばれました。(アルファベット順)

最優秀賞 1名 賞状及び副賞5万円

渡 邊 顕 子 筑紫女学園高等学校 1年 (福岡県)(日本語)

優 秀 賞 5名 賞状及び副賞1万円

三 浦 彩由香 学習院女子高等科 2年 (東京都)(日本語)

佐 野 純 子 関東国際高等学校 3年 (東京都)(日本語)

佐 藤 晴 香 福山暁の星女子高等学校 3年 (広島県)(日本語)

山 口 紅 葉 North London Collegiate School 11年 (イギリス)(英語)

山 下 未 来 広島女学院高等学校 2年 (広島県)(日本語)

特 別 賞 1名 賞状及び副賞1万円

角 田 千 紘 東京純心女子高等学校 1年 (東京都)(日本語)

第16回エッセー・コンテスト審査委員

委員長 高 橋 裕 子 (津田塾大学ライティングセンター長 英文学科教授)

委員 大 島 美 穂 (津田塾大学ライティングセンター運営委員 国際関係学科教授)

委員 大 原 悦 子 (津田塾大学ライティングセンター特任教授)

講 評

高校生エッセー・コンテストは、津田塾大学創立100周年を記念して2000年から行われ、今年で16回を数えました。今回は日本の戦後70年という節目の年にあたり、今年1月に亡くなったドイツの政治家・リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーに宛てた手紙形式で書いていただきました。

ヴァイツゼッカーは西ドイツの大統領だった1985年5月8日(ドイツの終戦記念日)にドイツ連邦議会で記念演説をおこないました。ナチス政権によるユダヤ人らの大虐殺(ホロコースト)という暗黒の歴史があったドイツでは、その歴史とどう向き合うか、が大きな課題となっていました。ヴァイツゼッカーは、こう説きました。「過去に向き合えない者は、結局のところ現在にも立ち向かえないことになります。」この言葉は世界中の人たちに深い感銘を与えました。

今回のエッセー・コンテストでは、この「ドイツ終戦40周年記念演説」の一部(英文)を読み、歴史と向き合い、歴史に学ぶとはどういうことか、未来のために若い人たちは何をすべきか、考えてもらいました。難しいテーマではありましたが、この夏は「戦後」あるいは「戦争」に関してニュースなどで耳にする機会も多く、関心は高かったのではないのでしょうか。全国そして海外から237人の高校生が作品を寄せてくれました。

「過去に向き合えない者は、結局のところ現在にも立ち向かえないことになります。」というヴァイツゼッカーの言葉の意味を、ただ表面的に理解するのではなく、いかに深く掘り下げて考えたか、が評価のポイントになりました。今年はとくに日本語で書かれた作品に優秀なものが多くありました。

最優秀賞渡邊さんの作品は、家族との団欒の中で昔のアルバムを見ていた時、写真の背景に発見したきこ雲の校章から、アメリカの小さな町の原爆投下に対する認識を改めて突き付けられたこと、さらにそれにとどまらず、戦時中の日本の周辺諸国での活動やベトナム戦争時におけるアメリカの枯葉剤使用の過去に思いを馳せ、負の歴史を直視し、自らの弱さと戦うことについて考察を深める、というダイナミックな議論でした。現在の私たちが縦(歴史)と横(現在の国際関係)の二つのつながりの中で生きることを自分なりに問うている点に、問題文のさらに先を行く問題意識が示されていました。文章も秀逸で、構成・表現力・独創性など、すべての項目で高い評価を得ました。

他の優秀賞の作品もアウシュビッツ収容所で目にしたものを臨場感溢れる筆さばきで叙述しているもの、問題文を自分の言葉で再度構成して考察したもの、カンボジアを訪れた際に現地で交流した経験からヒロシマの過去の記憶を継承していく必要があると強く感じたというエッセイ、パレスチナ問題を通じて報道の仕方を改めて問うているもの、長崎への修学旅行の事前学習で感じたことを問題文によってさらに相対化して検討した体験など、それぞれのやり方で過去と向き合っていることが新鮮でした。

歴史と向き合うことは、歴史を単に覚えることだけではなく、それを通じて自分なりに考察し、現在を生きることである、という問題文のメッセージが皆さんの文章から強く伝わってきました。なお、このコンテストは2012年度に採択された文部科学省大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」の一環としても実施いたしました。

第16回高校生エッセー・コンテスト審査委員長
英文学科教授 高 橋 裕 子

最優秀賞

筑紫女学園高等学校 1年
渡邊 顕子

今年は終戦70年を迎え、私の住む日本でも戦争を見つめ直す機会が多くありました。お盆で久しぶりに家族が揃い、いきなり賑やかになったリビングに、姉がアルバムを持ってきた時のことです。「懐かしいね。まだこんなに小さいよ。」皆で額をくっつけあうように見入っていた時、「これは何。」一枚の写真が私の心に引っかかりました。私が2歳の頃、家族でアメリカに住んでいた時の写真の中に、原爆の「きのこ雲」が刻みつけられた石板が写っていたのです。

それが高校の校門に刻まれた校章であることを知った私は衝撃を受けました。ワシントン州リッチランド高校では、校舎にも「きのこ雲」の校章が大きく刻まれており、クラブ活動のチーム名は「Bombers」というそうです。つまり、現地の人々は誇りをもって「きのこ雲」の校章を掲げているのです。リッチランドは長崎に投下された原爆の製造にかかわった人々の子孫が住む町で、原爆のおかげで日本人も日本に侵略されたアジアの人々も救われたことを伝える資料館がいくつもあるといいます。彼らは、原爆が7万4千人以上の人命を奪い、今も後遺症に苦しむ人々がいることを知らないのです。

私は、はっとしました。実は私たち日本人も戦争の負の面については十分教えられていないのだ、と気づいたのです。原爆や空襲でどれだけ多くの日本人が被害を受け、犠牲になったのか。自分たちの受けた戦争の痛みについて知る機会はたくさんあります。一方、日本がアジア周辺諸国を侵略し、相手にどんな苦痛を与えたのか、親や子を失った人々がどんなに心を痛め続けてきたのかを知る機会はほとんどありません。私たちは、戦争の負の面を直視することを避けながら、今の「平和な時代」を生きているのです。

一昨年、あなたが演説されたのと同じように戦後40周年を迎えたベトナムで、枯れ葉剤で失われた森を再生する植林活動に参加した時のことを思い出しました。枯れ葉剤で97%の森が失われ、今も奇形やガンに苦しむ人々がいることを知り、米軍に憤っていた私たちに、現地の人々が教えてくれました。今新たにエビの養殖地を作るために多くの森が失われており、そのエビの3割を日本人が消費しているのだと。実は私自身も森を傷つけた一人だったのです。

現在のように国際化が進み、人や物の交流が盛んな時代の中では、私たちが無意識に行っている行動が複雑に関係しあい、かかわりあっています。その横のつながりに目を向け、自分自身がかかわっている問題として真剣に向きあうことが必要です。そして「私自身に何ができるのか」を考えていくことこそが私たちに求められているのです。それと同時に過去の負の歴史を直視し、自らの弱さと戦い、罪と向きあう強さを持つことこそが未来の真の平和を築くことにつながるのだと思います。縦と横のつながりが交差する現在を生きる中で、真実を直視する強さを私は求め続けたいと考えます。ヴァイツェッカーさん、見ていて下さいね。

優秀賞

学習院女子高等科 2年
三浦 彩由香

ヴァイツェッカー様

私は今年の夏、あなたの祖国であるドイツを訪れました。ドイツの街並は本当に綺麗で、私は感動しました。しかし、今回私はドイツの良いところばかりを見てきたわけではないのです。

私はBuchenwald強制収容所を訪れました。ワイマールの街はカラフルで美しく、そんなところの近くに暗い歴史を持った強制収容所があることが最初は信じられませんでした。しかし、実際行ってみると強制収容所の場所だけ時間が止まったままで、異様な空気が流れていることが分かりました。もし、この場所が強制収容所であったことを知らされずに行ったとしても、過去に良くないことがあったということははっきりと分かります。それだけ、この場所が異空間だったのです。

私は囚人たちが歩いた道を歩きました。囚人が暮らしていた狭すぎる部屋、劣悪な環境のトイレ、焼却場、強制収容所の全てを見ました。そんな中でも忘れられない光景が一つあります。それは身長計がある部屋です。いえ、囚人の身長を計測する部屋ではありません。この部屋は囚人が殺される場所なのです。囚人が身長計にのると、隣の小さな部屋から銃を持った人が身長計に空いた穴から囚人を撃つのです。身長計がある部屋の床は赤いタイルでした。殺された囚人の血をすぐに洗い流せるように、他の囚人がこの場所が殺される場所であると悟らないために、血の色が目立たない赤色にしたのです。こんなことがあって良いのでしょうか？ 身長を測るからと騙されて、殺されていった囚人のことを思うと悲しくて悔しくて仕方ありません。ワイマールの人たちがここで何が起きたのか知っていたのにも関わらず、見て見ぬフリをしていたことも許せません。こんな酷いことがあって良いのでしょうか？ 強制収容所の中は臭いが違います。この臭いは昔、ここで何があったかを伝えているようでした。残された建物も、そこで何があったかを私たちに訴えるために必死に建っているように思えました。私はかつて、この場所で何があったかをしっかりと目に焼き付けました。

私にとって強制収容所はあまりにも衝撃的な場所でした。非常にショックを受け、強制収容所を訪れたことを激しく後悔しました。そんな時、「荒野の40年」と呼ばれるあなたの演説を読み、私は救われました。過去を知ることは今を生きる上で必要だったのだと思うと、心の中にあつた闇がずっと消えてゆきました。そして「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」というあなたの言葉と考えにはっとさせられ、勇気づけられました。

人は現在、未来、そして過去から成り立っていると思います。しかし、多くの人は現在や未来の方に目を向けがちです。知りたくない過去に目を背けたくなるかもしれません。けれども、過去を知らなければ過去にあったひどいことが現在や未来で起きてしまうかもしれないのです。過去を知ることは現在、未来を生きていく上で必要なことです。私はそのことを胸に刻み、精一杯生きていくつもりです。そんな私をどうか見守ってくださいね。



優秀賞

関東国際高等学校 3年
佐野 純子

ヴァイツゼッカーさんへ

ヴァイツゼッカーさんの演説を読み、私はとても感銘を受けました。歴史から目をそらすことなく前に進むこと。変えることのできない過去から学び、考え、若者同士が手を取り合って平和を構築していくこと。30年の時を経て、あなたの言葉やその勇気ある姿が曇ることなく、私の胸に届いたのです。

今、世界は本当に「平和」なのでしょう。第二次世界大戦から70年の時が経ち、歴史の授業の中で習うそれは、人によってはただ単なるテストのための知恵であり、ネットの中でのそれは、時として相手を批判する材料となってしまいました。私たち若者の中で戦争やそれによる被害は、すでに「過去」のものであり、今の私たちの暮らしは「平和」であるという考えが多くあるようなのです。それでも私は、今の日本や今の世界が「平和」だとは思えないのです。ヴァイツゼッカーさん。「平和」とはいったい何なのでしょう。ただ単に自分の目の前に戦火が広がらないことが「平和」なのでしょう。戦争さえなくなれば、世界中の人々が「平和」に「安心」して暮らしていけるのでしょうか。私は違うと思うのです。

私の祖父は、長崎の原爆で被爆し、私が幼い頃に痛で顔の半分を切除し亡くなりました。そして私と母が一生涯付き合っていかなければならない免疫不全の病気も祖父の被爆が原因かも知れません。戦争の被害が終わったのだとされるならば、私はそれに異議を唱えるでしょう。戦争やそれによる被害は、70年の時が経っても残るのです。しかし、それは私だけのことではないということも、私は知っています。日本人である祖父や母、私が身をもって感じてきた痛みを、日本も過去に他の国の人々に負わせ、今も苦しんでいたり、悲しみを秘めながら生きている人がいるのではないかと思うのです。それなのに、そのような歴史を受け止めず、考えることもやめてしまった人々があまりにも多いと思うのです。しかし被害に苦しむ人やその家族は、ただ考えることをやめてほしくないのです。そしてそこから犯すべきでない過ちを学んでほしいのです。今も病気の不安を抱えながら生きている人のことや、過去の壮絶な記憶と寄り添って生きている人のことを考え続けることを、私たち日本の若者もやめてはいけないと思うのです。

自分の国籍や溢れる情報にとられることなく、ただひたすらに思いを寄せようと試みるのが大事なのではないだろうか。それが私たち若者のすることなのではないだろうか。しかし、そんな風に思っている、私はあなたのように私の周りの人へ伝えることができません。平和のための勇気として、あなたのように自分の考えや意見を話す必要があるのではないかと思うのに。そんなとき、あなたの演説を読み、勇気ももらいました。だからこそ私はいまこのようにして自分の気持ちをあなたへ伝えたいと思い、この手紙を書いたのです。ヴァイツゼッカーさん。私は、1985年5月8日のあなたの勇敢な演説のように、ここに平和への怠ることのない努力を誓いたいと思います。



優秀賞

福山暁の星女子高等学校 3年
佐藤 晴香

ヴァイツゼッカー様

はじめまして。私は日本の広島県に住む高校3年生です。私が暮らしているこの街は、緑に囲まれて、多くの店や家々が立ち並び、とても賑わっている素敵なおところ。70年前に原爆が投下され、約14万人の方が亡くなり、街全体が焼け野原になってしまったなど、だれも想像できないほどに……。

私は小学生のときに読んだ本、「アンネの日記」で初めてナチスが行った、いえ、ドイツという国が行ったホロコーストを知りました。当時は、怖い、なぜそんなことができるのだろう、同じ人間なのにどうして……、そう感じるにとどまっていた。しかし、戦時中のそのような非人道的な行いは、ドイツだけでなく、私の祖国、日本を含めたどの国もが行っていたことを知りました。敗戦した日本は原爆の、戦争の被害国だと思っていた私には衝撃でした。私は以前から大学でなぜ戦争は起こるのか、戦時中の軍部の思想、民間の思想などについての研究をしたいと考えていました。ヴァイツゼッカーさん、あなたの演説文を読み、私は過去と向き合っていなかったことに気づかされました。戦争経験者はますます減り、この戦争の記憶が消え、実際に起こった、あの悲惨な現実が過去の歴史の一部になりかけている今こそ、私たち若い世代が過去を知ることで平和への一歩を踏み出すときなのですね。

第二次世界大戦が終わって70年がたった今、世界から争いは消え、戦争はもう起こらない、そう考える人も多いと思います。しかし本当にそうなのでしょう。私は、ある戦争経験者の方がテレビで語られた言葉を忘れることができません。

「今の日本の国情は戦前とそっくりだ……」

私は戦争に介入する以前の世論の動きや国の情勢などは体験してはいませんが、今日の世界の動きには、何か危険な気配を感じずにはられません。私たちの世代にも、このような違和感をもつ人は多いと思います。この違和感こそが私たちと歴史をつなぐ鍵になるのではないのでしょうか。もし、私たちが当時を知らないから、生まれていなかったから、という理由で過去から目をそらし、知る権利を放棄すれば、70年前の惨劇は必ず繰り返されるでしょう。そうならば、家族や祖国のために兵士として自らの命を捧げた父親たち、子供をかばって死んだ母親たち、両親を失い、飢えて死んでいった子供たち、戦争で亡くなった全ての方々から何も学ばず、ただ年月だけを過ごし、尊い犠牲を無駄にしたこととなります。戦争に正義はありません。どんな事情があっても戦争に参加した国はすべて悪だと私は考えます。ヴァイツゼッカーさんがおっしゃっているように、歴史上戦争を起こさなかった国は一つもありません。私たちは例外なく全員が罪人です。そんな私たちには、過去をしっかりと見つめ、自由と法を尊重し、平和のために個々人が働き、真実に正確に向き合うことによって、この先も平和を守っていく義務があります。

この夏、あなたに出会うことができよかったです。高校を卒業して大人になる前に、自分自身の日々の生活を見直せた気がします。来年の夏にまたお手紙させてください。過去に責任のある一人の人間という自覚をもって過ごした日々をあなたに報告します。

優秀賞

North London Collegiate School 11年

山口 紅葉

Dear Mr. Weizsäcker

May I begin by expressing my admiration towards your noble work in dampening the global post-war unrest. Your honourable self has truly been my inspiration and undoubtedly many others. I particularly admire how you claimed responsibility to redeem your nation's honor, after the damages inflicted upon its reputation by a handful of your forefathers. However, it is not so much the past I would like to focus on, just the present.

The world today is awfully prejudicial. One look at the newspaper, and it becomes apparent that the media is greatly responsible for this partisanship. The media obstructs our vision to the wider reality and instead, guides us to see merely a portion of what is true. They ultimately have the power to control every bit of information, and consequently our opinions on global matter. Therefore naturally, while there are those who benefit from this, there are those who suffer, thus forming a division. An example of a group of people who suffer from the media are the Arabs. I did my research on the origins of the Israeli-Palestinian war and saw the truth behind it. I now understand that the Arabs were victims of a reckless decision made by the UN and simply acted as a form of defence, only for the Israelis to seize this opportunity to take over their share of land. Unfortunately, this side of the story is never told by the media, therefore depicting the Arabs in a very negative light causing fear towards them.

Throughout your life, you have acknowledged that living in fear of one another is a dangerous thing. I wish that more people will learn to realise this fact and stop focusing on the differences, for they will soon find out that we, regardless of race or religion all lead very parallel lives. For this, we must learn to educate our own and not be too greatly influenced by the media. You have proved that this is possible. With patience and determination, you managed to prove the world wrong - that Germany is a great country that just fell into the wrong hands. Though the current situation is slightly different to what you managed to overcome, I turn to you for advice on this broad yet urgent matter ; what must be done to improve international relations for the future?

Yours sincerely,
Kureha Yamaguchi

優秀賞

広島女学院高等学校 2年

山下 未来

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー様

はじめまして。私は被爆三世である広島の高校二年生です。ナチスの罪を直視し、罪を償おうとしたヴァイツゼッカー様を、私は尊敬しています。私も将来、あなたのように平和に貢献したいと考えています。あなたの演説である「荒れ野の40年」は、世界中の多くの人々に影響を与え続けていますが、私もそのうちの一人です。

私は今年の春、カンボジアを訪れました。平和構築のために何をすればいいか現地の方と考えるためです。あなたはカンボジアに行ったことがありますか？カンボジアの人々はいつも笑顔ですよね。しかし、その笑顔の裏側には悲惨な過去があります。ご存知だと思いますが、カンボジアでは、ポル・ポトによる独裁政治のもとで内戦があり、約200万人が虐殺されました。私は現地で、その時代の悲劇を次世代に語り継ぐために活動する、DCCというNGO団体の方々と交流しました。DCCは、内戦時の歴史の教科書を作成し、全国に配布しています。日本は戦争に関する全国共通の教科書はありません。なので、この団体と交流したとき、私の頭の中であなたの言葉がよぎり、「カンボジアは内戦という過去に目を閉ざしていない。」と強く思いました。そして、ヒロシマについてはどうだろうかと考えずにはいられませんでした。

世界はヒロシマという過去に目を閉ざしていると私は思います。なぜなら、現在15,000発以上の核兵器が世界に存在しているからです。あなたが連邦議会での演説をしたとき、核保有国は一桁だったと思います。しかし現在、核兵器保有国は増え、二桁に達するほどになりました。ヒロシマの過去に目を閉ざし、結局のところ現在にも盲目になっている人々が世界中に多くいるのです。「非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」あなたはこうもおっしゃっています。70年前に起こったヒロシマの悲劇が、今の世界情勢のままでは、また起こってもおかしくないと、あなたも思われませんか。

私は地方新聞である中国新聞のジュニアライターをしています。被爆者である私の祖父母も同じことを言っていました。取材した多くの被爆者の方々は、「同じ悲劇を起こしてはいけない。私は自分の経験を後世に伝えるために生き残った。」とおっしゃいます。被爆者の方にとって、あの日のことを思い出すのはつらいことなのに、私たちに懸命に語ってくださいます。ヴァイツゼッカー様、被爆者から直接話を聞けるのは私の世代が最後です。私は被爆者の方々の思いを受け継ぎ、ヒロシマの記憶を後世へ伝え続けなければなりません。また、あなたの言葉を借りると、「老幼いずれを問わず、我々全員が過去を引き受け」、若い世代である私たちが「範を示さ」なければならないと思います。

私はその若い世代の一人として、核兵器廃絶のためにヒロシマのことを世界中に伝え、ヴァイツゼッカー様のように平和のために尽力していきたいと思っています。どうか見守っててください。



東京純心女子高等学校 1年
角田 千紘

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー様

初めまして。私の名前は角田千紘、高校1年生の15歳です。私は敗戦から40年たった1985年5月8日にあなたがおこなった記念演説の言葉に、30年の時を経て出会いました。そして、その言葉は私の戦争に対する考えを大きく変えて下さいました。私はその感謝の気持ちと、私があなたの言葉に出会って考えたことをどうしてもあなたに伝えたいと思い手紙を書くことにしました。

あなたの演説にもあったように、ドイツにはユダヤ人やジプシー、同性愛者などの人々を虐殺してしまった過去があります。特にユダヤ人はホロコーストの対象になり、犠牲者の数はアウシュヴィッツをはじめとする強制収容所で400万人、占領地で集団虐殺された人々とあわせると600万人に達する、人種差別として歴史に前例をみないものとなりました。

しかし、日本もドイツと同じ敗戦国であり、沢山の人々を殺してしまった過去があります。罪のない敵国の民間人を虐殺してしまったことも有名です。また、沢山の人が亡くなった過去もあります。今年、私は沖縄に家族で旅行に行きました。沖縄は今ではきれいな海の広がる観光地として有名ですが、70年前に日本唯一の地上戦となり沖縄県民の4人に1人が命を落とした場所でもあります。

そして、絶対に忘れていけないのが広島と長崎に投下された原子爆弾についてです。私の学校は長崎に姉妹校があり、毎年高校1年生は秋に長崎へ3泊4日の研修に行っています。その事前学習として、高校1年生は『焼身』という本を読まなくてはなりません。この本は長崎で戦争中に起こった出来事が詳しく書かれていて、原子爆弾のことについても細かく記されています。しかし私はこの本を読んでいる時、こう思っていました。「なぜ私はこんなに痛々しい歴史を学ぶ必要があるのか」と。皮膚がはぎ取られ全身から血脈の毛線が見える男、深い傷口から内臓が見える女の子など、文字で見ただけでも気持ち悪い表現は、読むのがいやになりました。しかも戦争は私が生まれる55年前の話で、今まで日本で起こったことも全く関係ないと思っていました。でも、ちょうどそんな時にあなたの演説に出会い「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目になる」という言葉を私は知りました。そして、私はまさに「過去に目を閉ざす者」であるということに気付くことができたのです。

今、世界では紛争などの争いが次々と起こっています。さらにこれから国と国との問題も増えていくでしょう。日本は今、平和です。しかし日本も関係のない話ではありません。憲法9条と集団的自衛権、安保法案、領土問題などの大きな問題にも直面しています。そしてあなたの言葉を知った今、思います。「今は平和だが30年後40年後に私の世代が社会を担わなければならない時、過去と同じ過ちをくり返さないよう歴史から学ばなければならない」と。

秋、私は長崎に行きます。でも、今までのように痛々しい歴史を学びたくない、なんて思いません。どんなに見ること聞くことが辛くても、そらさずに受け止めてきます。私は将来あなたのように大統領になって政治を動かす力を持つことはないでしょう。しかし、自分が歴史から学んだ過去の過ちを忘れず、30年後40年後、そして後世へ伝えていくことで未来が少しでも良い方向に向かうことは間違いありません。

私はあなたから沢山の大切な言葉をもらい、くださったおかげでこれだけ考えを変えることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。最後にあなたが若い人たちにお願いしたように私からもお願いがあります。どうか、これからの世界が平和であるように、見守っていて下さい。

私の思いがあなたの心に届きますように。

2015年度 第16回 高校生エッセー・コンテスト 応募者在学高校

県	公私	学校名
東京都	国立	東京学芸大学附属高等学校
	国立	東京学芸大学附属国際中等教育学校
	都立	大森高等学校
	都立	小平高等学校
	都立	新宿山吹高等学校
	都立	三田高等学校
	私立	学習院女子高等科
	私立	関東国際高等学校
	私立	錦城高等学校
	私立	麹町学園女子高等学校
	私立	杉並学院高等学校
	私立	東京純心女子高等学校
	私立	東京女学館高等学校
	私立	富士見丘高等学校
神奈川県	私立	文化学園大学杉並高等学校
	私立	鎌倉女学院高等学校
	私立	カリタス女子中学高等学校
	私立	函嶺白百合学園高等学校
	私立	慶應義塾湘南藤沢高等部
	私立	聖光学院高等学校
千葉県	私立	清泉女学院高等学校
	私立	横浜雙葉高等学校
	私立	国府台女子学院高等部
千葉県	私立	渋谷教育学園幕張高等学校
	私立	聖徳大学附属女子高等学校

県	公私	学校名
埼玉県	県立	不動岡高等学校
	県立	蕨高等学校
	私立	大乘淑徳学園淑徳与野高等学校
静岡県	私立	星陵高等学校
愛知県	私立	東邦高等学校
大阪府	府立	大手前高等学校
	私立	関西学院千里国際高等部
	私立	同志社香里高等学校
兵庫県	国立	神戸大学附属中等教育学校
	市立	葦合高等学校
広島県	私立	福山暁の星女子高等学校
	私立	広島女学院高等学校
徳島県	県立	城ノ内高等学校
長崎県	県立	長崎北陽台高等学校
佐賀県	県立	佐賀西高等学校
福岡県	私立	筑紫女学園高等学校
イギリス		North London Collegiate School
アメリカ合衆国		Walter Johnson High School
		Washington Japanese Language School

2015年度 第16回 津田塾大学 高校生エッセー・コンテスト 募集要項

募集内容

ヴァイツェッカーに宛てた手紙形式のエッセーを書いてください。
英語の場合は400words程度、日本語の場合は1,200字(横書き)程度にまとめてください。

応募資格

高校生(国籍・学年・性別は問いません)

応募方法

①A4用紙でワープロまたは手書き。
②応募作品に、氏名(フリガナ)・性別・住所・電話番号・高校名(所在県名)・学年を記載した表紙(A4用紙)を添付して、下記に郵送してください。

【郵送先】

〒104-8189 東京都中央区銀座1-15-6 KN銀座ビル8階
(株)栄美通信 津田塾大学 高校生エッセー・コンテスト係

募集期間

2015年8月1日(土)～9月7日(月) 必着

表彰

最優秀賞1名(賞状及び副賞5万円を贈呈)
優秀賞若干名(賞状及び副賞1万円を贈呈)

最優秀作品は、10月11日(日)津田塾大学において表彰し、津田塾大学広報誌「Tsuda Today」と津田塾大学ウェブサイト、優秀作品は津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。また、入賞者には10月9日(金)までに本人に通知します。なお、応募作品は返却しません。応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。

問合せ

津田塾大学ライティングセンター 高校生エッセー・コンテスト係
(TEL.042-342-5129 E-mail : essaycon@tsuda.ac.jp)

<http://www.tsuda.ac.jp/> 津田塾大学ウェブサイトで、第1回～15回の高校生エッセー・コンテスト選考結果等を掲載しています。



株式会社栄美通信は、広告代理業として各事業(進学情報事業・企業広報事業・教育広報イベント事業・企業広報イベント事業・進学情報誌出版事業等)の個人情報適正に取り扱い、個人情報の保護を徹底することが社会的責務であると認識し、「個人情報保護方針」を制定してお客様に安心して弊社のサービスをご利用いただけるよう、全従業員がこの方針に従って個人情報保護に対する取り組みを実施しております。個人情報についてのお問い合わせは【お客様相談窓口】TEL 03-3561-0471(平日10:00～17:00(12:00～13:00と土日祝日を除く))